

落合信彦

太陽の馬

下

集英社

太陽の馬



落合信彦
Nobuhiko Ochiai

集英社

たいよう うま
太陽の馬 ㊦

1995年5月19日 第1刷発行

著者 ◆ おちあいのぶひこ 落合信彦

発行者 ◆ 若菜正

発行所 ◆ 株式会社集英社

〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

☎03-3230-6100[編集部] 03-3230-6393[販売部] 03-3230-6080[制作部]

印刷所 ◆ 中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂

製本所 ◆ 中央精版印刷株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価はカバーおよび帯に表示してあります。

© 1995 NOBUHIKO OCHIAI, Printed in Japan

ISBN4-08-775194-5 C0093

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次 太陽の馬 ①

歸らざる日々 (①の続き)

5

一九九一年 秋

285

エピローグ 一九九二年 夏

313

装幀 Ⅱ スタジオ・ギブ
写真 Ⅱ フォトニカ

太陽の馬
①下

主な登場人物

矢島健二

全米で十指に入るコングロマリットのオーナー。元帝商物産社員。

飯島二郎

帝商物産代表取締役副社長。『飯島天皇』と言われるビジネスの鬼。矢島の恩人。

山岡卓也

帝商物産最年少の取締役。『カミソリの山岡』と言われるやり手ビジネスマン。

松林善三

矢島の育て親。『日本最後の俠客』と言われる松林組組長。

松林夕子

矢島とは本当の兄妹のように育てられた松林善三の娘。

管野重夫

帝商物産常務（一九七六年当時）。飯島をライバル視している。

マイケル・スカルピーニ

夕子の恋人。通称マイク。シシリアン・マフィアの後継者。

葉春花（イエ・チュンハ）

矢島の恋人。通称エレヌ。葉グループの総帥・葉春雲の長女。

帰らざる日々
(上)の続き

☆☆☆

「矢島君、至急社長室に来てくれ」

受話器を通して聞えてくる飯島の声は、いつになく緊張していた。

矢島は上着を引っかけて、社長室へと急いだ。

社長室には、太田と飯島のほかに、専務の秋山も一緒だった。みな一様に、深刻な表情をしている。

「まあすわってくれ」

飯島がアゴで椅子を指した。

「私から話していいですね」

飯島の言葉に太田と秋山がうなずいた。

「モスクワ支社の藤木君を知ってるだろう」

「ええ、親しくはありませんが」

藤木貢は機械部出身だが、矢島が入社してから六カ月後にモスクワ支社長となった。以来、彼とは会っていなかったし、仕事上での連絡をするということもなかった。

「実はな、三十分ほど前、モスクワ支社から電話が入って藤木君が急死したと言うんだ」

「事故ですか、それとも病気で？」

「自殺らしい。いつもは一番早く出勤する藤木君が、九時になっても現われないので、宿舍のサボーイ・ホテルに電話を入れたところ、答えがなかった。そこで、支社の者がホテルに行って部屋を開けてもらったところ、彼が首を吊っていたと言うんだ」

「外務省からは、連絡があつたんですか」

飯島が首を振った。

「電話を入れてみたが、向うの大使館からはまだ何の連絡も入ってないらしい」

矢島が腕時計に目をやった。三時半、ということは現地ではまだ朝の九時半。地元の警察が大使館に連絡するのは、まだまだ先の話だろう。

「藤木君の家族には、私の方から知らせる」

「ヴィザを取得してやらねばなりませんね。少なくとも奥さんには」

「ところがソ連大使館は、緊急ヴィザはひとりにしか出さないと言うんだ。この前、材木輸入の件が流れたんで、うちに対してのいやがらせなのだろうがね」

「それじゃ、そのヴィザを奥さんに使ってもらえばいいじゃないですか」

「本来ならそうすべきだが、われわれとしてはもっと有効に使いたいんだ。ハッキリ言って、奥

さんが行っても棺にすがって泣くぐらいで、何の役にも立たない。それよりうちから誰かが行った方が、ずっとメリットがある。支社も混乱してるだろうし、業務に支障も来しているはずだからね」

「僕に行けというわけですね」

飯島と太田が同時にうなずいた。

「君にやってもらいたいことは三つ。まず、至急藤木君の遺体をこちらに送り返すこと。次に彼の自殺の原因をさぐり出すこと。単にノイローゼだったのか、それとも他に理由があるのか。こないだ私が電話で話したとき、彼は元気でいつもと変わった様子はなかった。しかし、急に仕事のストレスが爆発するということもあり得る。今後海外支社に赴く者たちのためにも、そのところをハッキリさせて参考にしたいんだ。次にモスクワ支社の社員たちをまとめ、業務内容について逐一こちらに知らせること。支社長が死んだということ、社員たちはかなり動揺しているはずだ。次の支社長はできるだけ早く送り込むので心配はないと彼らに伝えてくれ。支社長が死んだからと言って業務が滞るようなことがあってはならない。そうならないための引き締めが大事なんだ。君の判断力と指揮能力に期待しているよ」

「いつ頃発てばいいんです」

「明日の午前中の便で行ってくれ。チケットは日航のカウンターで受けとれるようにしておく。支社の方にも一応連絡はしておく」

それからすぐに矢島は狸穴のソ連大使館に赴き、ヴィザを取得した。そして、翌朝早く、モス

クワに向つて成田を發った。

入管を済ませて、荷物受けとり場に入った。暗いというのが第一印象だった。これまでに世界のいろいろな空港を入り出したが、ここシエレーチエボほど明りの少ない空港は初めてだった。電気を節約してるのか、それともともと電力不足なのかはわからないが、これでは一国の玄関口が泣くというものだ。コンヴェアーベルトの上に載った荷物を見分けるにも、すぐ近くまで行って目を凝らさねばならない。その上、甘ずっぱいロシアタバコの強烈な臭いが鼻をつく。

二十分ほど待つて、やっとベルトが動き始め、荷物が出てきた。

税関検査を終えてロビーに出ると、日本人の男が声をかけてきた。

「矢島さんですね。支社の吉田と言います」

と言つて彼が矢島のスーツケースを持った。年の頃は三十歳を過ぎていようか。東京本社では見たことがない顔だった。

正面玄関を出て、すぐそばに停まっていたチャイカに乗り込んだ。

「モスクワの冬にはこの車が一番なんです」

吉田が言った。

「まるで戦車ですね」

「重いからすべりが遅いし、ぶつけられても大丈夫なんです」

五分もしないうちに車は空港の敷地を出て、モスクワへの道突っ走っていた。

左側に白樺の林、右側に荒涼とした雪原、その雪原にポツンポツンと立つ掘建小屋。何とも寒々しい景色だ。

「モスクワは初めてですか」

ハンドルを握りながら吉田が訊いた。

「ソ連邦は初めてです」

「おもしろいところですよ。変な魅力があるんです。私は十年前この大学に留学したんですが日本には帰りたくなくなってしまった。何事にも大雑把でスローなこの国民性が性に合っているんです」

「と言うことは、あなたは現地採用？」

「ええ、五年前から雇ってもらってます。通訳をやったり、ドライヴァーをやったり、使い走りをやったり、まあ便利屋のようなものですね」

矢島は窓の外に目をやった。雪が降り始めていた。対向車線には、軍用トラックが時折すれ違いうぐらいで、乗用車の姿は全くない。世界の果てのようなこんな国に魅力を感じる吉田のような男もいるのだ。世間は広いものだと思わず感じていた。

「今回の藤木さんの件で、支社の連中はかなりショックを受けてるでしょうね」

「そうですね。警察に呼ばれたりして神経質にはなってます。私も、随分としつこい尋問にありましたよ」

「あなたも？」

「ええ、第一発見者でしたから」

「発見時の模様を聞かせて下さい」

吉田が説明した。大体、飯島から聞いていたことと同じだった。

「外傷はなかったんですね」

「ええ、ですから警察は自殺と判断したんです。残念としか言いようがありません。私はよく彼の運転をしていたのですが、実に親切で温か味のある人でした」

「性格的にはどうでした？ 気が強い方かそれとも……」

「強いとは言えませんが、やさしすぎたと思いますよ。誰に対しても気を使っていましたね」

「遺書が残したんですか」

「ありました、奥さんと子供さんに宛てたものだけです。警察が一応押収しましたが、明日返してくれるはずです」

「仕事上のプレッシャーを感じていたようには見えませんでしたか」

「そりや支社長という責任あるポストですからね。でも、そのためにノイローゼになったという様子は見られませんでしたよ」

「遺書は読んだんですか」

「一応、目は通しました。封筒にも入っていなかったし、机の上に丸出しにしてありましたね。内容は奥さんと子供さんに対する謝罪で、ごく短いものでした。ですから警察に渡してもいいと考えて、差し出したんです」

「ということは、警察に渡さないものがあつたということですか」

吉田がうなずいて、胸のポケットに片手を入れた。分厚い封筒をとり出して、矢島に渡した。「本社の方が来るまで隠しておこうと思つたんです。随分と苦労しましたよ。警察がしつこくて、当然、彼らは第一発見者の私が何かを隠していると考えましたからね」

矢島が封筒を開けた。

二冊の手帳と数枚の写真があつた。

「警察が勘ぐると思ひまして」

「その通りですよ。感謝しますよ、吉田さん」

写真を見ながら矢島が言つた。写真は全部で五枚あつたが、それらの写真には藤木が全裸でベツドに横たわり、そのとなりになれた全裸の十五、六歳の少年が写つていた。

「人それぞれ、知られたくないことがありますからね。彼が少年に興味があつたということは、知っていましたか」

吉田が言つた。矢島は吉田に一目置き始めていた。なかなか情けがありそうだし、氣転もきく。氣になるのは手帳なんです。一冊は去年のものでう一冊は今年ですが、一月のところを見て下さい」

矢島が手帳をめくつた。ギッシリとアポイントメントの予定が書き込まれている。

「ボリスという名がやたらと出てくるでしょう」

そう言えばそうだ。十日までに五度会つてゐる。

「誰なんです、このボリスというのは？」

「それがハッキリしないんですよ」

「と言うと？」

「私は直接会ったことはないんです。他のロシア人と会うときは、大抵私が通訳として同席するんですが、ボリスの場合は藤木さんが単独で会ってるんです。会見場所までは、何度か車で送ったことはあるんですがね」

「藤木さんは英語はできたんでしょう」

「堪能でした」

「多分、英語か日本語でそのボリスとは話してたんでしょうね」

「しかし、このモスクワで日本語ができるロシア人などほとんどいないし、英語だつてごく限られた人種しか話しませんよ」

矢島は再び窓の外に視線を移した。道路の両側に巨大なアパート群がひしめいている。市街地に近づいてきたようだ。

考えすぎかもしれないと思った。ボリスが女性という場合だつてある。秘かに逢う相手の名を偽名で手帳に書くのは、浮気をしてる男の常識だ。

単純な自殺にすぎないのかもしれない。働きすぎてストレスがたまつて思考力がなくなり、すべてが馬鹿らしくなつてしまう。そしてある夜、突然精神的に空っぽの状態に陥り、自らの命を断つてしまう。働き盛りの中年男によくあるシンドロームだ。